ビジュアル・ナラティブの可能性：「塔本シスコ展」と「ふるさと絵屏風」を中心に

土元哲平

2022 年 8 月に、筆者はビジュアル・ナラティブに関心を持つ研究者とともに、滋賀県内の地域づくりや芸術活動について学ぶ「ビジュアル・ナラティブ合宿研修」に参加した。本稿では、「塔本シスコ展」と「ふるさと絵屏風」の 2 つを中心に取り上げ、これらとビジュアル・ナラティブとの接点について考えたい。

ビジュアル・ナラティブとは

ビジュアル・ナラティブは「視覚イメージによって語る行為、あるいは視覚イメージとことばによって語る行為」(やまだ, 2018a, p.262)である。やまだ（2018a)によれば、ビジュアルは、身体感覚に近いイメージを伝えることができるのに加え、それ自体が特有の「テクスト」であり、独特の「経験の組織化のしかた」「語り方」「コミュニケーション方法」をもつ。狭義の言語を用いたナラティブは、語り手の視点や価値観の影響を受けやすいのに対し、ビジュアルでの語りは、1 つのビジュアルの中で「異なるパースペクティヴから見た見方を一画面に同時共存させたり、異なる時間の出来事を一画面に描いたりする」（やまだ, 2017, p.14)ことが可能であるため、読み手による解釈の自由度が高く、様々な視点から物語をイマジネーションできるという特徴を持つ。従来の物語が時間の経過を前提としているのに対して、複数の時間、世界が同時に存在することを許容するという点が、ビジュアル・ナラティブの革新的な点の一つである。例えば、ヒエロニムス・ボスの三連祭壇画（トリプティーク）である『快楽の園』を例にとると（図 1）、3 枚の絵それぞれに異なる世界が描かれているだけでなく、1 枚 1 枚の絵にも、さまざまな時空間が同時共存している。この絵画の鑑賞者は、絵のどの部分からでも絵を解釈したり、物語を生み出すことが可能である。

図１　The Garden of Earthly Delights in the Museo del Prado in Madrid, c. 1495–1505, attributed to Hieronymus Bosch (1490-1500) Public domain (https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/6/6d/The_Garden_of_Earthly_Delights_by_Bosch_High_Resolution.jpg)

以下では、「ビジュアル・ナラティブ合宿研修」の中でも、「塔本シスコ展」と、「ふるさと絵屏風」の見学を取り上げ、それらとビジュアル・ナラティブとの接点について考えたい。

塔本シスコ展

第１に、滋賀県立美術館で開催されていた「塔本シスコ展」（会期：2022 年 7 月 9 日～9 月 4 日）（https://www.shigamuseum.jp/exhibitions/4046/）での経験について述べたい。筆者自身、塔本シスコ（以下、シスコさん）の名前は知っていたものの、実際に絵を目にするのは初めてであった。シスコさんの絵を見て、まるで生き物のような桜島の姿をはじめ、1 枚 1 枚の絵に圧倒された。以下、箇条書き的であるが、ビジュアル・ナラティブとのつながりについて考えた点を記述する。

① シスコさんの絵をいくつも鑑賞して感じたことは、1 人の個人の絵であって、一見ユニークな絵でも、何らかの一般性が見られることである。シスコさんの絵は、1 つ 1 つが特徴的であるが、どれを見てもシスコさんの絵だとわかる。さらに、絵における余白の使い方や曲線などは、「自由に描いた」ように見えて、どこかモデルのようなものがあるように感じる。それは、シスコさん自身が、植物や風景の観察を通してブリコラージュ的に作り上げてきたモデルなのかもしれない。例えば、曲線の曲がり方は植物が自然

に作るかたちと類似している。

② 絵を鑑賞する経験と、パンフレットの絵を見る経験の違いを感じた。美術館での絵画の鑑賞は、身体を介した経験であるように思われる（絵の具の質感や、実際の大きさなどを感じる）。一方で、パンフレットに印刷された絵画は、どこか遠くにあるものとして感じられる。これは、ビジュアルを研究する際に、実際の絵を見て分析することと、電子化したデータを PC 上で分析することとの違いにも関係すると思われる。

③ シスコさんの絵は、「美術館で収蔵している芸術作品を相対化」していると感じた。滋賀県立美術館では、事業方針として「すでにあるコレクションを相対化するための（中略）作品の収集」をおこなっている（滋賀県立美術館, 2022）。シスコさんの絵を見た後に他の収蔵作品を見ると、“伝統的な”絵から距離をとることができた。

シスコさんの絵は、一見すると誰でも描けるように見えるが、決してそうではない。ビジュアルで語り続ける中で生み出されるモデルとでもいうべきものが、シスコさんの絵を芸術たらしめているのではないだろうか。

ふるさと絵屏風

第二に、滋賀県甲賀市にて見学した「ふるさと絵屏風」を取り上げたい。これは、コーディネートをしてくださった上田洋平先生が中心的に取り組んでいる地域主体の活動である（上田, 2014 を参照）。こちらも箇条書きとなるが、ビジュアル・ナラティブとの関係について素描したい。

① 「ふるさと絵屏風」には、地域の人びとが子ども時分に経験した出来事が描かれている。地域の方々は、この絵屏風を介して生き生きとコミュニケーションをしていた。このように、ビジュアルには、ビジュアルを媒介とした「三項関係」をつくることで、語りを促す機能がある（やまだ, 2018b）。一方で、この時代を知らない子どもたちや、他の地域の人がふるさと絵屏風を見ても、そのような生き生きとした語りは生成されづらいだろう。しかしながら、「ふるさと絵屏風」について、地域の方が重要であると考えているのは、絵屏風それ自体を残すことというよりも、「絵屏風に向き合う姿勢」の継承であった。つまり、将来、子どもたちに、絵屏風を見て話に花を咲かせる自分たち（地域の方々）の姿を思い出してほしいということである。この点は、「ビジュアルが他のビジュアルを生成する」という意味で興味深い。上田（2014）は、この「ふるさと絵屏風」を作成する一連のプロセス（心象図法）について、次のように述べている。

（心象図法の）その本質は、地域で経験された個々の事実かが絵画の中に正しく記録・復元・保存されることにあるのではなく、地域に暮らしあるいは地域に関わる一人ひとりの記憶や経験を持ち寄って、その意味や確からしさを語り合い高め合いながら、まさ

にそのように共に語り合える過去を制作しようとする 共同創造行為であること、そのように語り合える時と場の実現であることにある。手法の工程のところどころにそうした場や語りを触発する機会が組み込まれている。（上田, 2014, p.6）

② ビジュアルを語る中で、特定の絵についてのエピソードが、パフォーマンス化され、ドラマ化されるプロセスは、私たちが日常的に研究紹介をしたり、詩を書いたり、論文を書いたり、オートエスノグラフィーを書く際にも通ずるプロセスであると考えられる。「ふるさと絵屏風」の語り手は、聴衆を意識しながら、共有できたり笑い合えるようなビジュアルの「むすび」方を探っていく（ビジュアルの裏側にある二重のストーリーも含めて）。このような、ナラティブのパフォーマンス化、ドラマ化は、自己物語を構築していくことにも関係すると考えられる。

以上、本稿では、ビジュアル・ナラティブに関連する２つの研修を取り上げたが、研修全体を通して、人々のライフ（生活・生きること）とビジュアルとの深い結びつきを改めて実感した。また、「ふるさと絵屏風」のように他者とビジュアルを「共同生成」（やまだ, 2021）することの重要さを再認識した。「ビジュアル・ナラティブ研修」では、琵琶湖上で漁師の方からお話を伺ったことも印象に残っている（図２）。そこで感じたのは、琵琶湖は私たちにとっての「庭」である、ということであった。つまり、琵琶湖は、人によって耕された（cultivated）自然であり、HOME と PUBLIC のあいだにあり、様々なアクティビティがおこなわれ、自己との対話の場でもあり、大切に「手入れ」「お世話」し続ける必要がある場所であった。こう考えた理由の一つは、筆者自身が庭の研究に取り組んでいるから、ということもあるが、それでも「庭」というイメージが腑に落ちたのであった。シスコさんの作品「自由の女神達」（1994）にも「塔本シスコはキャンバスを耕す」と書かれていた。「庭」は、芸術の営みを理解するメタファーの一つとして重要なのかもしれない。

図２　琵琶湖上（竹生島近く）にて漁師さんのお話を伺う

謝辞

現地に精通している上田洋平先生のコーディネートがあってこそ、深く味わいのある経験をすることができました。1つ1つの経験に心から感動しました。記して感謝申し上げます。

引用文献

滋賀県立美術館.（2022）　ミッション　https://www.shigamuseum.jp/about/mission/

上田洋平.（2014）　絵画制作を通じた地域生活誌の創発：心象図法による実践とその展開　滋賀大学環境総合研究センター研究年報, 11(1), 3-22.

やまだようこ.（2017）　ビジュアル・ナラティヴ：時間概念を問う　こころの科学とエピステモロジー　創刊準備号, 9-15.

やまだようこ.（2018a）　ビジュアル・ナラティブ　能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦　質的心理学辞典（p.262）　新曜社.

やまだようこ編（2018b）　N：ナラティヴとケア　第9号　特集：ビジュアル・ナラティヴ――視覚イメージで語る　遠見書房.

やまだようこ（2021）　ナラティヴ研究：語りの共同生成（やまだようこ著作集　第5巻）　新曜社.

バックナンバー

- 土元哲平. (2022). 転機と偶有性（キャリアと文化の心理学（8））. 対人援助学マガジン. 49. pp. 259-263.
  https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol49/43.pdf
- 土元哲平. (2022). 「よいリハビリテーション」メタファーとキャリア教育（キャリアと文化の心理学（7））. 対人援助学マガジン. 48. pp. 267-275.
  https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol48/51.pdf
- 土元哲平. (2021). へき地小規模校で学ぶ意義について考える：「オートエスノグラフィックな発達」概念を手がかりに（キャリアと文化の心理学（6））. 対人援助学マガジン. 47. pp. 273-275.
  https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol47/51.pdf
- 土元哲平. （2021）. 職業指導からキャリア教育へ（キャリアと文化の心理学（5））. 対人援助学マガジン. 46. pp. 278-281.
  https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/45.pdf
- 土元哲平. （2021）. 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達（キャリアと文化の心理学（4））. 対人援助学マガジン. 45. pp.318-322.
  https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf
- 土元哲平. （2021）. オートエスノグラフィーの特徴と主流の方法論（キャリアと文化の心理学（3））. 対人援助学マガジン. 44. pp.261-263.
  https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/51.pdf
- 土元哲平. （2020）. 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー（キャリアと文化の心理学（2））. 対人援助学マガジン. 43. pp.287-299.
  https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/52.pdf
- 土元哲平・サトウタツヤ. （2020）. 教育・発達心理学とキャリア教育の接合（キャリアと文化の心理学（1））. 対人援助学マガジン. 42. pp.288-303.
  https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol42/51.pdf